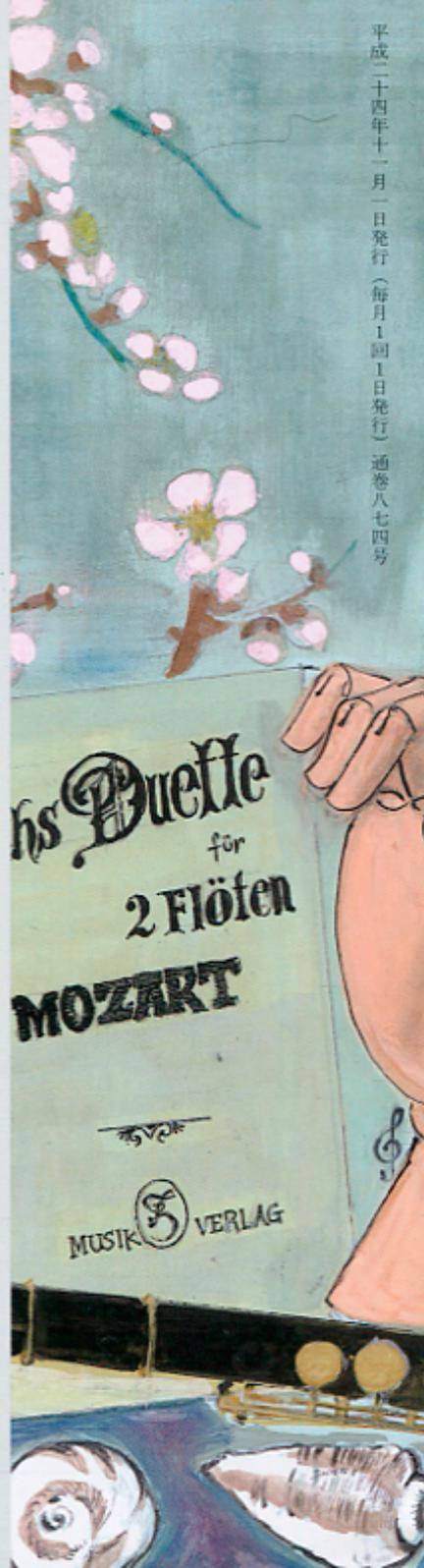


火星

平成二十四年十一月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

飛石を伝ひ秋日の伸びてきし

撥ね橋のもどるに間あり秋茜

連れ立ちて風となりゐし花野かな

月の坂うしろ姿の懐かしき

十三夜なんぞと夫の外にゐさう

案山子伏す乳房のやうな山の裾

手入する松はなれざる松の風

乱るるを嫌へる風の吾亦紅

蓑虫に夫のその後を問ひにけり

日イ射してきし茶の花を剪る手許

太白星

烏賊釣の火の連なれる父の故郷
烏賊釣船ランプ汚れてもどりぬし
城崎の川に湯気立ち祭くる
草市の風吹く橋を渡り来し
足速き妹の来る茄子の馬
淡き色ばかり咲かせて施餓鬼寺
堂守に眠り支度や天の川

杉浦典子

浜口高子

八朔の鯉の叩きし宗祇水
爽やかに合宿男子の嗽かな
月に吊るざんばら筆の影の揺れ
伝言板に伝言ひとつ燕去ぬ
白桃売りの声いつしかに遠ざかる
水打つて占ひの灯のともりたり
逆さまに鶏吊らる秋日かな

火星作品

山尾玉藻選

夏 旺ん筒を出でくる心太 大和郡山城 孝子

ひと声に牛止まりけり大夕焼

オクラ咲く月に触れたる順に咲く

墨擦つて盆の夕べを遊びけり

起きぬけに桃吸うてゐる生身魂

広すぎる卓となりけり秋茄子 宝塚河崎尚子

車座の黙つてかじる焼もろこし

鯨の潮飯屋の卓のてかりをり

燕去に築地の土のこぼれつぐ

カフエバーの薄暗がりに籠の虫

干梅の夜の冷反す一つづつ 山本耀子

雪溪のくぼみに蝶や生きてをり

秋澄むや民芸館にまぐさの香

木道の突つ切る花野音のなし
 石投げて倒木鳴らす秋夕焼
 浅沓の音の八月十五日
 八幡坂口夫佐子
 扇風機古き話をもち出され
 射干や男無頼でありしころ
 秋簾磧の風に煽られし
 二百十日みづうみに鎌洗ひをり
 大山文子
 汲音の闇を背に地藏盆
 母が家の二百十日の煎茶濃し
 柿の木の葉に隙のなき厄日かな
 内灘の風に西瓜のまだら焼け
 送行や比叡下りくる水激し
 墓に映ゆる吾が顔見て墓洗ふ
 西宮米澤光子
 子子に覗かれてゐるこの世かな
 体ごとばけつ回して水打ちぬ
 幔幕の公民館へ蟻の列
 寝返つて畳の熱き昼寝かな

選のあとに

山尾 玉藻

けり秋茄子、どのような背景のある食卓であるのか想像の膨らむところであるが、いずれにしても「秋茄子」の艶やかさが寂寥感を募らせる。

干梅の夜の冷え反す一つづつ 山本 耀子

漬け梅の皮を薄く丈夫にするために夜干しをする。梅の実が露をもつほど夜の気温が下がる必要があるが、昨夜は上手く冷え込んだ様子である。中七で一旦切つて改めて下五「一つづつ」と言い做したところに、梅干の首尾よき出来を願う心情が見て取れる。〈雪溪のくぼみに蝶や生きてをり〉、雪溪の窪みに羽を休める蝶を見つけた時のこのころの昂ぶりを素直に十七文字に託しており、その点が大変好ましい。

射干や男無頼でありしころ 坂口夫佐子

オクラ咲く月に触れたる順に咲く 城 孝子

ハイビスカス科のオクラは人の背丈ほどに伸び、黄いろの大ぶりな花も見上げるほどの高さに咲くことがある。オクラの花の上に月が浮かぶ美しい景が作者の興趣を惹き、思わず「月に触れたる順に咲く」と捉えたのである。洗練された感覚である。同時発表作へひと声に牛止まりけり大夕焼、鮮やかな夕焼の中で息の合った人と牛の関わりの一齣が大変印象的である。

鯊の潮飯屋の卓のてかりをり 河崎 尚子

海辺の小さな飲食店での嘯目詠であろう。使い古された質素なテーブルが窓外の潮明りに映えて光り、店内のあらゆるものまでこぼこと日を反しているのだろう。鯊の潮の明快さと安っぽいイメージを覚える「てかる」の表現が相乗効果を生み、印象鮮明な景を作りあげている。へ広すぎる卓となり

この場合の「無頼」とはアウトロ一的な男ではなく、誰にも縁を求めず世俗に拘ることのない生き方をする男を言ったのだろう。いつの世も女は無頼な男にころ惹かれるが、せちがらい時世では大方の男は無頼に憧れるだけで終るのも理解できる。オレンジ色で斑点のある射干は野趣に富む花だが、夕べには静かに萎む潔さもある。言われてみれば、鄙びた風趣に翳りを漂わせる射干は、男が無頼であることができた世に相応しい花のようだ。〈扇風機古き話をもち出され〉、黴の生えたような厄介な話を横で首を振る扇風機の風が混ぜ返しているようでなかなかユーモラス。(以下略)

恒星圈

白数康弘

この闇は丹後の闇よ盲汁
ふさがれて闇汁の闇逃場なし
賄ひに男が立てり盲汁
仏壇高明先生の閉められてあり盲汁
触れぬしは女の肩か盲汁

坂口夫佐子

大東由美子

湿原の高き一木合 飲の花
新聞紙に寝かせ涼しき高野槇
盆明けの庭に来てゐる白い猫
立秋の筒井に洗ふモロヘイヤ
石の上に蝶伏しゐたり出水あと

羅に背筋ありけり「火星」あり
大筒は草に立ちあり揚花火
大山に架かる大虹仰ぎけり
骨つぼに一箸づつや夏の果
るり色の蝶ふはふはと朴散華

城 孝子

高尾豊子

夫入院ひさごの花のどつと殖え
八月十五日大佛殿の朝ぐもり
ボンレスハム均等に切り秋暑し
病人に朝おそろしき鴟の声
月代や父いつしんに牛洗ふ

炎昼を来て自動発券機と話す
金婚や紫苑の庭に集まりぬ
秋水に浸しし我の手の斑かな
蚊を打つて精進料理の席につく
神杉に洞あり瘤あり蟬時雨

獅子座

山尾玉藻推薦

根本ひろ子

西村節子

松本和子

谷底より石切る音や秋ひでり
とんぼうの虫食むまなこ動かざる
臥舟の朽ちて近江の水澄めり
生身魂西瓜の種をほろと吐き

川端俊雄

田中文治

揚花火にさそはれ下りし山の駅
月明の海に真珠の育ちをり
端居して我と我が身に質すこと
忌の明けのすでに秋意の深空かな

川端俊雄

藤田素子

立秋や養錢箱にワンカップ
山道をゆづりゆづられ栗の毬
ふる里は梨畑の中兄待てる
青柿を踏み進める葬の列

麻服にひと日の疲れありけり
新郎の固き拳に扇あり
しろがねの髪刈り上げし生身魂
糠床へ双手つつ込む土用かな
ひとすぢの足跡浜に土用あい
山の辺の道にはみだす牛膝
どの家も開け放たれし盆の月
眼帯の人に小鳥の来てゐたり
炎昼や携帯電話ぶつと切れ
鴉鳴けば鴉こたへる朝ぐもり
母譲りトマトに砂糖かけたるは
踊の輪抜けていつもの貌となり
宿坊にスリッパ積まる鉦叩
八朔の地藏に積まれ野辺のもの
挽ぎたてのトマトの匂ふ終戦日
夕ひぐらし轆轤挽く手の止まりたる